聖徒タイムス　**誌上法話**」より・平成六年

三浦惠伸

懺悔文に因んだお話です。

無始よりこのかた、無明の酒に酔て、造るところの罪業、無量無辺なり。　或は姑となりて嫁を憎み、或は嫁となりて姑に逆らい…。」と

右の如き、人間関係の葛藤に身を焦がした、K子さん六十三歳　強迫神経症患者）の述懐を聴いてみましょう。

私は三十歳ごろから、お姑さんとうまくゆかなくなって、自分自身の不安ばかりに目が向くようになりました。手の汚れが気になって、一時間も二時間も手を洗い続けなければ納得できなかったり、鍵をしめたかどうかが不安になって、百回以上も確かめないと納得できなかったり、そのために生活がめちゃくちゃになってしまったのです。しかも、そのこだわりがおかしいとわかっていながら、どうしても止められません。約三十年間、あちこちの精神科に通いながら、死の苦しみを味わってきました。

ところが、前からの胃病が悪化して手術をし、胃癌だと知らされ、その時から私の人生が変わったのです。私は精神科医から不安を〝あるがままに受け入れる〟ようにいわれました。だが、そんなことはできるものかと思っていたのです。ところが胃癌だということであれば、どうあがこうと数年の命しかないではありませんか。ですから、受け入れるも入れないもなく、自分の生命はまもなく終わるという〝事実〟が、自分の前につきつけられたのです。

このとき、私はどう不安に逆らってみても仕方がない、自分の事実を認めるしかない、だとすれば、数年間は私の生命があるということも事実だ。だからその限られた時間を思いきり大切に生きてみようと思うようになりました。

すると、あれほどまでに苦しんでいた強迫行為が、嘘のように少なくなったのです。この大切な時間を、手洗いやその他の確認行為に使ってしまっていてはつまらない、と考えるようになり、昔やっていた染色や織物などの趣味を積極的にやるようになり、夫や息子のために懸命に家事に励むようになりました。

するとどうでしょう、これまでにない幸福感が私の身の内に湧きあがってきたのです。私は自分の生命の有限なことを癌によって知らされ、それによって強迫のとらわれから解放されて、人生の真の大切さを知りました。一日一日を最高に大切にして生きられれば、数年後に死がやってきても、さらに大きな力に自分をまかせて、後悔することなく、死に自分をゆだねることができると思います。」　　ー人はなぜ悩むのかー　より

身につまされる思いです。

不安という現実に向き合ったとき　諸法実相）、三十年来の苦悩から自然に解放されたK子さん、

懺悔文は、　「一切の業障海は皆妄想より生ず」と、それは〃迷いの考え〃であるといい、だからこそK子さんの場合も　衆罪は霜露の如く」苦悩が消滅して、本来のK子さんが輝きだしたのでしょう。それにしても家族共々勿体ない年月です。

翻って、

「日蓮幼少の時より仏法を学び候しが、念願すらく人の寿命は無常也。・・・されば先臨終の事を習ふて後に、他事を習ふべしと思いて、一代聖教の論師、人師の書釈あらあらかんがへあつめ（勘集）て此を明鏡として、一切の諸人の死する時と、並に臨終の後とに引向へてみ（見）候へば、すこしもくもりなし。」

妙法尼御前御返事　一三一二

と、先師の言動と臨終とを検証するという、真に徹底した学問の姿勢から、人生をスタートされた吾祖日蓮大聖人は、三十代にして、無明を破り、酒酔から人類を覚醒せしめ、法華経本門の真実世界に、自他共にゴールインする道を開拓され、爾来、建長五年四月二十八日の朝より、弘安五年十月十二日の夕に至るまで、正に末法万年の闇を照らさんがための御生涯であらせられたことを拝察するとき、滅後七一二年を経た　今、「一分の宿福あって、遭い難き妙法に遭いたてまつ」っている、私共聖徒は、　霜露を消除し、惑業を滅する、慧日」たる

南　無　妙　法　蓮　華　経

を以て、未だ、世界平和を実現し得ていないことを〃懺悔〃せずにはおれません。